

## 田舎のSDGs（エスディーズ）

園長 児嶋 草次郎

9月末の数日間、石井記念友愛社の南側の道路添いのカンナの手入れをしました。5月に咲き始めて以来ほとんど手入れをしていませんでしたので、ヤブガラシ、カナムグラ、野生化したアサガオ等の蔓（つる）が絡んで、ほとんど被いつくした所もあります。周囲の草を刈りながら、そういう所は、カンナごと切り倒します。（すぐ新たな芽が出るので大丈夫です）。「藪枯らし」とはよく言ったものです。その生命力は藪を枯らすほどの勢いなのです。カンナなど一溜りもなく所々が枯れていました。

枯れた所には、スコップで穴を掘りなおして元気な所の株分けをして捕植します。その一連の作業を、園芸部の子供・職員と一緒にやり、30日には、早朝から午前中にかけて移植作業を一人でやりました。

この道路添いにこれらのカンナを植え始めて、もう30年以上になるのではないかと思います。最初は赤と黄色からスタートして、ピンク（2種類）、橙（だいたい）、クリームと色も増えていきました。園内も含めてこんなに、10種以上の色とりどりのカンナの花の咲いているところは、宮崎県内におそらくここだけでしょう。何のために道路添いに植えているのか。それは、地域の方々への感謝と恩返しです。花を見て美しいと感じれば、それだけで心が癒（いや）されます。人生色々ありますので、この道路を通った時、気分を変えるきっかけになればと思うのです。

私は秋晴れの空の下、一人で一輪車を押しながらカンナの移植作業を楽しみましたが、その時考えたことを、今回ここに書かせていただきます。

ところで「月刊福祉」10月号に、編集者からの依頼があり、渋沢栄一と石井十次との関係、そして現在の石井記念友愛社の取り組み等について、わずか2ページほどですが書かせていただきました。「月刊福祉」ではこのところ渋沢栄一について毎月連載しており、石井十次もその人脈の一人として取りあげていただいたことはありがたいことであり、私も感謝をこめて書かせていただきました。

その連載の目的についてこう書いてありました。「渋沢栄一は、近代日本の産業基盤づくりに尽力した。実業による私利は公益に資するべきという主張をもって、社会福祉事業にも深く関わった。渋沢が関わった事業・団体の設立時と現在から、今の福祉にもつながる視座を探る」

渋沢栄一は、一万円札の肖像に予定されたり、来年のNHKの大河ドラマの主人公にも決まっているとか。楽しみです。ただ、石井との関係は、互いに尊敬し合う関係ではあったかもしれませんが、東京と岡山という地理的制約もあり、そう交流は深いものではありませんでした。

さて、今回は渋沢について書こうとしているわけではありません。送られて来たこの「月刊福祉」10月号で別に特集していた、「SDGs（エスディーズ）は福祉に何をもたらすのか」を思い出しながら、作業をしているうちにアレコレと 생각이込み上げて来たのです。その思いをここに書き記しておきます。

そもそもSDGsとは何なのか。最近では色んなところでその言葉を目にするようになりました。

企業家の方が、胸にその丸く虹色のように光り輝くバッチをつけている場面に出会う機会もあります。徐々にその理念は社会に普及して来ているのでしょう。「月刊福祉」10月号の中で、SDGsに多大な関心を持っておられる元NHKTVのキャスター国谷裕子氏は、その思想について次のように説明しています。

「根本にあるのは、我われが今のような生産と消費を続けていけば、地球環境は、人間にとっても、ほかの生物にとっても持続可能なものではなくなるという危機感と、あらゆる人々の人権を守るというふたつで、『地球を破戒から守ること』『誰一人取り残さないこと』を柱として掲げています。」

世界全体の様々な社会の課題を改善しようという目的で、国連で2015年に採択されたのがSDGsだそうです。ちなみにSDGsとは、Sustainable Development Goalsの略で「持続可能な開発目標」と訳します。2030年までの目標として、17のゴール（目標）と169のターゲット（指標）が決められているそうです。

その掲げるゴール（目標）をそのまま書き写してみます。

①貧困をなくそう ②飢餓をゼロに ③すべての人に健康と福祉を ④質の高い教育をみんなに ⑤ジェンダー平等を実現しよう ⑥安全な水とトイレを世界中に ⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに ⑧働きがいも経済成長も ⑨産業と技術革新の基盤を作ろう ⑩人や国の不平等をなくそう ⑪住み続けられるまちづくりを ⑫つくる責任つかう責任 ⑬気候変動に具体的な対策を ⑭海の豊かさを守ろう ⑮陸の豊かさも守ろう ⑯平和と公正をすべての人々に ⑰パートナーシップで目標を達成しよう

また国谷氏はその出会いを次のように説明されています。

「ひとつの課題にひとつの解決策があるのではなく、さまざまな課題が底辺で関連し合っていることを意識し、全体がよくなるようにいかに解決するかという視点を大事にしているものだと知り、『これからの社会に必要なのはこういう考え方だった』と気づかされたのです。」

そして、次の氏の言葉には説得力がありうなづくしかありません。

「日本では『三方よし』といますが、三方を意識すること自体はよくても、今や『地球よし』『未来よし』と、さらにたくさんの『よし』が必要です。」「土台にあるのが地球の健全性で、その上にビジネスが成り立つという発想に変えなければなりません。」「『我われは、地球を救う機会をもつ最後の世代になるかもしれない』とあるように、時間はないのです。」

「月刊福祉」10月号では、各分野の取り組み状況も紹介してありました。経団連SDGs本部統括主幹の長澤恵美子氏は、「三方よし」の考え方があったので「企業も比較的すんなり受入れたという側面があった」と述べた後、次のように説明されていました。

「先行きが不透明な不確実性の高い時代に企業経営を考える時、世界共通語であるSDGsは、ビジネスチャンスとリスクを把握するうえで役立ちます。さらにSDGsを用いたコミュニケーションは、相手が消費者であれ、投資家であれ、政府であっても、共通理解を促進し、新たな連携や協働が創出されるきっかけをつくります。」「企業がSDGsにそって活動していけば利益は上がるはずですし、株主の期待に応えることも、消費者や顧客の期待に答えることもできます。」

おそらく今後、世界をめざす企業においては、SDGsの理念は共通の価値観として定着していくのだろうと予想できます。今まで、「オレ達のやっている商売は慈善事業ではないのだ！」と喝破していた人々も、この理念を共有しようとする限りにおいて、福祉との共生を考えざるを得なくなるのでしょう。先ほどの、渋沢栄一の「私利は公益に資する」的な感性が必要になるわけです。

私がSDGsに出会ったのは、1年前くらいでしょうか。中味は、私のように福祉に生きている人

間からすればあたり前のことであり、何だか仰々（ぎょうぎょう）しくて、そのアピールの仕方が派手で、近寄り難いものを感じていました。しかし、今回「月刊福祉」の特集を読んで、ストンと心の中に入って来たのです。今後、石井記念友愛社の理念と、どう調和させていくかを考えていかねばなりません。いや、石井記念友愛社の理念は、すでにSDGsの理念と一体のものだと、カンナの移植作業をしながら発見というか感じられて来たのです。

「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ相愛すべきこと」

今までは、この「人」を「地域の人々」レベルでとらえて来ましたが、「地球の人々」にまで視野を広げねばなりません。この「天」と「人」の間に、青く輝く美しい地球をイメージしなければなりません。おそらく石井十次は、そこまでイメージしていたのだと思います。石井十次には他に「天地は一体なり、一人本気になれば自ら全世界に響く」という言葉もあります。地球規模でものごとをとらえようとする感性が石井十次にはあったのだと思います。交通機関が発達し、世界が狭くなり、コロナもあつという間に世界に広がるような状況となり、また人間の過度の開発や文明の発達により地球の温暖化が確実に進むようになり、様々な自然災害が発生するようになりました。ようやく人間たちは地球規模でモノゴトを考えるようになったのだと思います。言うならば、石井十次に追いついて来たのです。

石井十次の「天は父なり 人は同胞なれば 互いに相信じ相愛すべきこと」が世界の人々の共通の理念になれば、少なくとも ①貧困をなくそう ②飢餓をゼロに ③すべての人に健康と福祉を ④質の高い教育をみんなに ⑩人や国の不平等をなくそう等については改善に向かうことになるでしょう。

私が今回特に考えたことは、石井記念友愛社の方針の一番に掲げてある「自然主義」についてです。石井記念友愛社の事業計画書では、「自然主義」について次のように説明しています。

「自然主義」＝健康をつくります。日本の自然・風土・文化・農業との触れ合いを通し、人格と体を養う。自然教育は、情操を豊かにし、『敬天』の感性を育てる。

#### 実践目標

- ①自然への畏敬と感謝の気持ちを育てます。
- ②食育教育を実践します。
- ③自然教育・労作教育を実践します。

昭和20年、石井記念友愛社として再スタートした時からこの「自然主義」は掲げており、石井十次の理念を継承したいという思いからこの言葉を方針に入れたと思われます。石井十次の自然主義は、ルソーや二宮尊徳の思想がバックにあります。

立ち止まって考えてみると、日本の社会福祉法人の中で、「自然主義」などという言葉理念・方針の中に掲げているところは、他にはないでしょう。一般的には福祉は生活や人と人との関係を支援する仕事であり、自然は、特に大都会等においては関係がないわけです。福祉政策は常に大都会の人々を対象に考えるものであり、「自然」などという言葉は、どこからも湧いて来ないでしょう。

しかし田舎においては、自然との共生はごく当然のことであり、心身の成長と健康は自然との共生なしにはあり得ません。日本の伝統的農業は、常に自然を畏敬し自然と共生する中で成り立って来ました。その農業から生まれる文化が敬天の感性を育み、その文化が子供たちの心身の教育を生み出す基盤となって来たのです。地球規模の発想はなかったかも知れませんが、⑪住み続けられるまちづくりを ⑭海の豊かさを守ろう ⑮陸の豊かさも守ろう等を実現して来たのです。それらが戦後、アメリカの収奪的大規模農業や合理化された大都会の文明が入ってくることによって崩壊していきました。

今、私たちは、子供たちの養育・教育を託されています。この田舎において子供たちがほんとうに育つためには自然は必要不可欠なものです。田舎においては福祉と教育、そしてこの地球の自然とは、しっかり「底辺で関連し合っている」のです。そのことを、この度 SDG s は再認識させてくれたのです。

子供たちが育つには自然だけではなく、地域の人々の“あたたかい目と支援”（⑰パートナーシップで目標を達成しよう）も必要です。地域の人々とは、この地元の人々を含めて、学校の先生、関係機関、後援会の人々等まで含みます。それらの人々と常に良好な関係を持続していくには、ただ支援に甘えるだけではなく、感謝と私たちにできる恩返しも必要でしょう。その気持ちは我々職員たちだけではなく、ここで育つ子供たちにも必要です。

地域（地球）の自然を持続可能な状態で維持していくこと、そして、この子供たちを養育・教育する人的環境も今後も継続していくために、その関係づくりに気配り・目配りしていくこと、そのことがこの田舎で生きる私たち現場の人間の責任でもあります。

ここでようやく、道路添いのカンナの手入れ作業に話がつながります。30日の朝の新聞には、新型コロナウイルス感染症の世界の状況が載っていました。世界の感染者は29日現在3300万人を越え、すでに100万人以上が亡くなっているのだそうです。（日本は29日現在83,731人で1,581人が亡くなっています）。中国の武漢で昨年末に発生して9か月弱、今や世界各地に拡散しているのです。それだけ地球が狭くなったということなのでしょう。その狭い地球の中で人間たちは勝手気ままに自然を破壊して来たわけです。天からのしっぺ返しとも言えます。

私たちは、この田舎の茶臼原で、自然と謙虚に向き合い、四時、未来につながるやるべき仕事を粛々とやっていきたいと思えます。作業中に、近くの農家のナガミツ・マモルさんがトラクターの上から声をかけてくださいました。芋堀の機械にまきこまれて大けがをされたと聞いていましたが、回復されお元気な様子で安心しました。

そして、その後10月3日には、ナガミツさんが道路添いに植えておられる日本スイセンを、また園芸部の職員子供たちと一緒に掘り起こし、球根分けして、約100mのカンナの間に植えさせていただきます。これから、カンナの終わった冬場、この日本スイセンの花が道を行きかう人々を癒してくれることでしょう。

ここまで書いた所に、今度は毎月送られてくる「致知」11月号が到着。さっそくページをめくっていると、興味ある対談が目にとまりました。日本最古の歴史書「古事記」について、千葉大学名誉教授三浦佑之氏と早稲田大学名誉教授池田雅之氏とが語りあっているのです。

その中で三浦氏は『古事記』は人間の起源、人間の祖先について語っているのではないかと前置きした後、「古代日本人は人間の祖先を葦（あし）の芽、植物だと考えていた。」と述べておられるのです。「人間は土から生まれたとする『聖書』の人間誕生神話とは随分違います。」とも付け加えられています。そして最後には、「環境問題でも『自然と共生する』といいますけれど、人間も地球に根を生やした草だと考えれば、私たちもまた自然と一つであるという意識が出てくる。」と結んでおられます。

この言葉は、私にとっては新たな発見であり驚きです。石井記念友愛社の「自然主義」は、日本人としてのDNAから来ている。私が自然との共生にこだわる感性も、そこからきているのだらうと納得がいきました。ついでに私の名前も草次郎です。父虜一郎が付けてくれた名前ですが、生まれた時からここで生きることを宿命づけられているのかもしれないと、ハウスの中で秋野菜の種播きをしながら思いました。未来を信じて花や野菜を植え続けたいと思います。皆様、コロナはまだまだ油断できません。御自愛ください。